広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ホーソーン文学と読者 ： 「古い指輪」を中心に
Author(s)	藤沢, 徹也
Citation	英語英文學研究 , 67 : 69 - 81
Issue Date	2023-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/54581
URL	https://doi.org/10.15027/54581
Right	著作権は，執筆者本人と広島大学英文学会に帰属するものとします。
Relation	

ホーソーン文学と読者
――「古い指輪」を中心に

藤沢　徹也

1. はじめに

ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の「古い指輪」（“The Ancient Ring”）は，1843年に『サージェンツ・ニュー・マンスリー・マガジン』（*Sargent's New Monthly Magazine of Literature, Fashion, and Fine Arts*）の2月号に実名で収録された。実際に書かれたのは1842年11月初旬で，新婚のソファイア（Sophia）と旧牧師館に引っ越して，新たに書いた最初の作品である（McDonald “The Old Manse Period Canon” 20）。ホーソーンの生前には再録されず，1879年に妻のソファイアによって，死後『ドリバー・ロマンスと他の作品』（*The Dolliver Romance and Other Pieces*）に入れられた。

この作品をメインで論じた論文はほとんどないが，研究ノートの短いものはある。たとえば，ジョン・J・マクドナルド（John J. McDonald）は，主に作中人物のエドワード・キャリル（Edward Caryl）のモデルとしてヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow）を挙げてその2人を比較し，ローラ・バラード・ケネリー（Laura Ballard Kennelly）は，ホーソーンがイギリスに関する歴史書をいかに利用したか考察し，島田太郎はこの作品を手掛かりにしてホーソーンのアレゴリーへの傾斜について議論している。物語の大部分を占める指輪に関する物語中物語である「伝説」は，ジェームズ・K・フォルサム（James K. Folsom）が言うように，「相当につまらない伝説（rather jejune legend）」であることに間違いはなく，失敗作だと考えられていることが，論じられることの少ない原因のひとつだと思われる（79）。

本稿では，この短編において，指輪にまつわる「伝説」はたいした内容でもないのにそれを激賞したり，また一方で不満を示したりする作中人物の反応に，ホーソーンの読者への期待と失望が示されていることを論じたい。ほとんど読まれない作品なので，あらすじをごく簡単に紹介しておく。エドワード・キャリルが婚約者のクララ・ペンバートン（Clara Pemberton）に指輪を贈ると，彼女はその指輪を元に物語を作って欲しいと頼む。それに応えて，彼は「伝説」という物語を作り，それは物語中物語となる。17世紀初頭のイギリスからその「伝説」は始まり，悪魔の宿る指輪は人間の悪行で呪われたものになるが，19世紀のニューイングランドの教会で貧しい人の手により募金箱に入れられた。その行為により指輪は浄化される。この「伝説」を読み聞かされた聴衆はそれを絶賛する。

テクスト中で物語中物語である「伝説」を書いたのは作中人物のエドワードであるが，彼にそれを書かせたのは作者ホーソーンである。本稿では，作者ホーソーンに焦点を当てて議論したい。

2. 道徳物語として受容する聴衆

物語の舞台はイギリスからホーソーンと同時代のニューイングラインドに移り，教会での募金のシーンになる。募金を集める2人の執事が登場する。一方の貧しい人々（労働者）を担当するティルトン（Tilton）は，募金箱の中はコインばかりで，その額の少なさに嘆き，自ら10ドル寄付しようとするような，「素朴で思いやりのある」人物である（Hawthorne, *Centenary Edition* XI 349；本稿でのホーソーン作品からの引用はすべてこの版により，ローマ数字の巻数と頁数のみ示す）。もう一方のトロット（Trott）は上流階級の人が座っている1階席を担当し，募金箱の中は紙幣が中心であった。彼は貧しい人々の少ない募金を見て，「人々は銅貨2，3枚で天国への入場券を手に入れるつもりなのだろうか」と言ったり，「募金を増やすには，募金箱の出し方しだいだ」と言ったり，すべて自分のポケットから募金されたものかのように誇っていたりして，いい印象を与える人物ではない（XI 349）。道徳物語の伏線だと考えると，いいことがあるとすれば，善良なティルトンのほうであり，最後に報われるのは彼であることを期待する読者は多いだろう。

この教会は募金に熱心な人々の集まりだったのだろうか。上流階級に関して，「ほとんどの銀行券は募金者のサイフの中で最も少額のものだった」というので，彼らが特に募金に力を入れていたわけではないようだ（XI 350）。一方，貧しい人たちはというと，額は少ないながらも精一杯のことをしたというわけではないと思われる。それは，心優しいティルトンが募金された額を見て「きっと悪魔がこの箱の中にいるんだ」と言っているからだ（XI 351）。募金箱には偽札が入っていることもあり，貧しいなりに精一杯の募金がされていたら，ティルトンがそのように言うはずがないことを考えれば，貧しい人たちも上流階級と同じく募金には熱心でなかったと考えられる。このように募金活動に特別熱心な教会でもなく，貧しい人ほど献身的でもない状況で，チューダー王家に伝わるエリザベス女王のものだったという高価な指輪が寄付されるのであれば，上流階級の席からだと考えるのが普通であろう。それでも貧しい人たちの中から，高価な指輪が寄付されたことを聴衆が受け入れるのはなぜだろうか。ある出来事がいかにあり得そうにないことであっても，実際の現実世界でのことであれば，起こってしまったことを否定することはできないのだが，アリストテレースが『詩学』第9章で述べているように，フィクションには現実の出来事よりも本当らしさが求められる。

貧しい集団の中から，エリザベス女王が着けていたような指輪が献げられるとは普通考えにくいにもかかわらず，聴衆がそれを受け入れるとなると，美徳がたたえられる道徳物語の出来事として受容しているからだと思われる。フォルサムは，「一種の教訓話（exemplum）だと思う」と指摘している（79）。

文芸評論家の千野帽子は，ファンタジーや謎解きミステリーなど「ほんとうらしくない」ことが起こるジャンルであっても，そのジャンル内で要求される別の「違和感のなさ」や「納得感」が要求されると述べている（116）。「古い指輪」を美徳がたたえられる道徳物語として読むのであれば，真摯に募金集めに励みながらもいつもよい結果が得られない善良な執事の募金箱に，非常に高価な指輪を差し出したのは，お金持ちではなく貧しい人たちからで，それゆえに指輪の呪いは浄化されたという話に違和感はない。また，千野は，ツヴェタン・トドロフも示唆しているようにと前置きした上で，「人は，言説やコンテンツがどういうジャンルに属するかを判断した上で，そのジャンルの「お約束」に合致しているかどうかを気にしながら，その言説やコンテンツを受信・読解していくもののよう」だと述べている（116）。聴衆はエドワードの語る「伝説」を，美徳をたたえる道徳物語と捉え，期待していたお約束である美徳が成就したまさにこのことに賞賛の言葉を送った。また，キリスト教的には，貧しい人が精一杯の募金をすることは素晴らしいことだという「マルコによる福音書」第12章41節－44節も一役買っているであろう。

エドワードは指輪に関して，「指輪の中の悪霊は，長らく住み着いていたが，目を引かない善意の行為で浄化され，今や貞淑で献身的な愛の象徴となった」とモラルをはっきりと入れている（XI 352）。このように，モラルも明示され，指輪も邪悪なものから婚約者に渡す指輪としてふさわしいものとなり，物語はハッピーエンドで終わる。言い換えれば，何の変哲もないハッピーエンドで終わる道徳物語として幕を閉じる。道徳を前面に出すのであれば，ハッピーエンドでないほうが効果的であるように思える。そのような終わり方の作品が，「古い指輪」と同時期の旧牧師館に住んでいたときに書かれている。例えば，怖がられるより愛されたかったと言って美女が死んでしまう「ラパチーニの娘」（“Rappaccini's Daughter”）が1844年，自分の作った薬で妻を死なせてしまう「痣」（“The Birth-mark”）が1843年に書かれている。そのような終わり方のほうが道徳はより読者に届くはずだし，今挙げた2作品はホーソーンの代表作と言える作品となっている。しかし，読者が単純に喜ぶ作りのハッピーエンドに，「古い指輪」の聴衆は様々な褒め言葉で絶賛する。

“Very pretty!—Beautiful!—How original!—How sweetly written!—What

> nature!—What imagination!—What power!—What pathos!—What exquisite humor!"—were the exclamations of Edward Caryl's kind and generous auditors, at the conclusion of the legend.（XI 352 下線筆者）

文学作品に対して，褒め言葉を羅列するする場面が，『七破風の屋敷』（*The House of the Seven Gables*）の中にも登場する。それと比較して見えてくることを考察してみたい。文筆活動もしているホルグレーヴ（Holgrave）が後に婚約者となるフィービー（Phoebe）に物語を語る。第 13 章「アリス・ピンチョン（Alice Pyncheon）」でその物語が語られるが，彼らの先祖の過去の事件や言い伝えを元にした，雑誌に発表する予定のホルグレーヴの創作作品である。その物語では，マシュー・モール（Matthew Maule）が催眠術で隷属状態にしていたアリスを自分の結婚式に呼んでかしずかせる。すると，アリスは隷属状態から放たれるが，彼女は結局亡くなってしまうという悲劇の形で終わる。それを語り終えた後，途中で眠ってしまい物語の内容をほとんど覚えていないというフィービーに向かい，ホルグレーヴはいかに優れた作品であるかを強調するために，文学作品に使うことのできる，思いつく限りの褒め言葉を羅列する。

> "My poor story, it is but too evident, will never do for Godey or Graham! Only think of your falling asleep, at what I hoped the newspaper critics would pronounce a most brilliant, powerful, imaginative, pathetic, and original winding up!"（II 212 下線筆者）

これらの形容は，「古い指輪」の聴衆と同じような褒め言葉である。それらは道徳物語であろうが，悲劇であろうが，どんな物語にも使えるようなありふれた褒め言葉だと言える。「古い指輪」のほうは，確かに聴衆は数名いたが，表現を変えてホルグレーヴよりもさらに多くの褒め言葉を口にしている。また，最後に述べられる「絶妙なユーモア（exquisite humor）」はどこにも見当たらない（XI 352）。あえてユーモアと捉えることができそうなのが，銅貨 2，3 枚で天国に行ける入場券を買ったとでも思っているのだろうかという言葉や，募金額を増やすには募金箱の出し方だいであり，それには生まれつきのこつがあるという言葉であるが，これらはユーモアとは言えないであろう。ここで，浮かび上がってくるのが，よくある道徳物語に満足し，変哲もない物語にとにかく出来合いの褒め言葉を並べる聴衆の姿である。集まってきたのは「親切で寛大な聴衆」だが，それを通り越して，物語に真摯に向き合わない残念な読者の姿と言えるであろう。

3.「肺結核」(1834) との比較

エドワードの「伝説」を聴衆が絶賛する中，婚約者のクララは作品を褒めはするものの，「あなたのモラルは私を満足させないの。指輪でどんな考えを具体的に示そうとしたの？」と不満をこぼす（XI 352)。このクララの発言について考えるために，他の似た作品を引き合いに出したい。フレデリック・ブルース・オルセン（Frederick Bruce Olsen）が指摘しているように，ギフトブックである，1834 年の『トークン』(*The Token and Atlantic Souvenir: a Christmas and New Year's Present*) に掲載されたある作品にほぼ同じ趣旨のことが書かれている（2)。その作品は匿名の著者による，「肺結核」(“Consumption”) という題名のものである。ストーリーを簡潔に紹介すると次のようになる。ある恋人が遠距離恋愛をするが，男性が心変わりをする。女性はそのうち結核にかかり，医者からも治らないと言われるが，男性が心を入れ替え戻ってきて，彼女につきそうと結核が治り，2 人は幸せに暮らした。物語はここで終わらず，作者と同時代の立派な人というのが出てきて，内容について不平を述べ，作者が登場してそれに答える。

> ‘This is all very well,’ said a very respectable contemporary of my own, after reading the above reminiscence, as he turned the manuscript over with his thumb and finger, looking suspiciously now at its back part, and now at its front; ‘this is all very well, sir, but what is the moral?’
>
> ‘Moral? sir,’ I returned; and I repeat my reply, lest any other meddler should ask the same question; ‘the moral is, that love is an infallible cure for consumption; and, sir, I consider the above history of a case successfully treated, as invaluable to all medical men, young lovers, and consumptive patients.’ (188–89 下線筆者)

その同時代の人は，「この話は全くすばらしいけど，モラルは何なんだ？」と作品を褒めながらも，作品のモラルを求めている。この物語はよくあるセンチメンタルな話で，モラルについても，「愛が全てを解決する」とか「愛し続けることの大切さ」などが明確に思い浮かんでくる。この不平を言った人は最後のページを何度もくってモラルを探しているので，それが書かれていることを疑っていない。物語に真摯に向き合い，作品が伝えたいことを自ら探求していく姿勢を持たず，手っ取り早く物語の核心をわかりやすく単純化した言葉で知ろうとする態度だと言える。

一方，この作品の作者は，「モラルだって？」と聞き返しているので，モラル

を書くことを想定していないのは明らかだが，他の「いらぬ世話を焼く人(meddler)」に同じ質問をさせないためにも，「愛は結核の絶対的に正しい治療薬なのだ」とモラルを付け加える。特にクリスマスのためのギフトブックにも合うように，愛の大切さを強調した，いわば，ロマンティックな物語を書いているのに，それをモラルとして言い直すという愚行をしないといけない状況に，この作者の失望や怒りまでも感じられる。というのは，その後，医者，若い恋人，肺結核にかかった患者すべての人に非常に貴重なものとして，うまく書けているとさらに具体的に述べて念押しをしているからだ。

「古い指輪」の場合も，クララのさらなるモラルを求めた発言に，エドワードは気が乗らないまでも，この物語「肺結核」の作者と同様，彼女の要求に応えた状況も共通する。彼の，「心からお願いしたいのだけど，これで十分だということにしてくれないかな」という言葉に，彼の複雑な気持ちを感じ取れる（XI 352)。ホーソーンはこの「肺結核」が掲載されていた『トークン』に多くの作品を発表している。1831 年に 1 編，1832 年に 4 編，1833 年に 2 編，1835 年に 3 編，1836 年に 3 編，1837 年に 7 編と，毎年のように掲載されている（Stewart 31)。それゆえ，彼が 1834 年のこの「肺結核」という作品を読んでいたことは十分考えられる。それから 10 年近く経ってもその存在を忘れていなかったとすれば，読者に妥協しないといけない痛々しい姿が自分自身と重なっていたのであろう。

このように，エドワードの書いた「伝説」にギフトブックに掲載された「肺結核」を重ね合わせると，ホーソーンの意図が少し見えてくる。つまり，モラルを聞かれるという行為は，エドワードの書いた「伝説」がギフトブックレベルのものであること，そして，クララはその程度の「いらぬ世話を焼く人」であることを表している。実際に，クララのモラルを求めた発言に深い意味があったかといえばそうではないようだ。彼女は，婚約者としての「自分の褒め言葉は他の人のものに比べて大きく違うので，他の人のようには褒めてはいけない」と思いつき，あえて発言してみただけで，「肺結核」の作者が想定していたようなお節介をしただけだと言えるであろう（XI 352)。

クララの要求に応えてエドワードは，「指輪は人間の心で，悪霊は欺瞞だと言えるかもしれない。それは，様々に姿を変えるけど，世界の悲しみや災いの全てを引き起こす悪なんだ」と答える（XI 352)。島田は，「この最後の部分は，我々今日の読者から見ればまさに蛇足であり，全体の効果を打ち壊し，古雅愛すべき一篇の伝説物語を，アレゴリーの次元にまで引き下げているように思える」と述べている（64)。実際，エドワードのこの言葉は，彼の作品中でうまく具現化されてはおらず，ギフトブックよりさらにレベルの低いものになってしまったと言ってもいいのではないだろうか。クララはそれ以上追求せず，「世界がこの物

語について，なんと言おうとも，その物語を評価する」と激賞して終わる（XI 352）。やはり，クララのさらなるモラルを求めた発言は単なる思いつきで，深い意味はなかったのだと考えられる。

4. 読者への期待と失望

ここで，先ほど取り上げた，ホルグレーヴの書いた物語中物語である「アリス・ピンチョン」に再度注目してみたい。ジェーン・ベナルデーテ（Jane Benardete）は，この「伝説」は女性のための雑誌である『ゴーディーズ・レディーズ・ブック』（*Godey's Lady's Book*）が要求することに合わせて書かれていると述べている。そうすることで，ホーソーンは，雑誌用の軽い話を作れることと共に，表面的な作品とそうでないものとを区別できることを示し，そして，同時代のアメリカのフィクションの最も一般的な取るに足りない，センチメンタルな様式への軽蔑を示唆したと論じている（233）。

一方，「古い指輪」の「伝説」への聴衆の反応は，ホーソーンの読者への失望を表していると考えられる。聴衆はハッピーエンドでわかりやすいモラルを含んだ物語というだけで，定型のありふれた褒め言葉で激賞する。クララは作者が付け加えるのを嫌がるさらなるモラルを思いつきで尋ね，作者はそれに渋々応じざるをえず，不完全にしか答えることができなかったにもかかわらず絶賛した。ホーソーンが，そんな読者の要求に応え続けなくてはいけない文学市場をよく思っていないのは確かであろう。ここで注意したいことは，クララにさらなるモラルを求められたとき，エドワードは「半分とがめるような笑み（a half-reproachful smile）」を浮かべていることだ（XI 352）。言い換えれば，この時期，半分はまだ読者に期待していると言えるだろう。

では，立て続けに長編ロマンスを発表した1850年代初頭はどうであったのだろうか。『緋文字』（*The Scarlet Letter*）はある程度成功を収めたが，女性人気作家に比べると，本の売れ行きは圧倒的に少なく，文学市場をかなり意識し，読者受けする作品を書こうとしたのが『七破風の屋敷』である。日記や手紙からこの作品を仕上げるのに苦労したことが伺われる。特に，かつて敵対していた一族同士の結婚は強引なハッピーエンドだと指摘されることもある。先ほど述べた「アリス・ピンチョン」を，読み聞かせられている途中で眠ってしまって内容を覚えていないという読者フィービーに，作者のホルグレーヴは「半分皮肉を込めてほほえんで（smiling half-sarcastically）」いる（II 212）。彼女を読者の代表と考えると，この時期も，半分はまだ読者に期待していると言えるであろう。

その後の1851年に執筆し，翌年に発表されたホーソーン最後の短編である「フェザートップ」（“Feathertop”）では，魔女が空を飛ぶときに使ったほうきを

骨組みとし，内臓にはわらをつめた袋を使い，頭部としてカボチャをのせてかかしを作り，魔法のパイプを吸わせることにより，人間の紳士の姿に変えていく。その初期段階のかかしは，ロマンス作家が「虚構世界にあふれんばかりに住まわせてきた，雑多な素材で構成され，使う価値がないのに何千回と使い古された，中途半端で失敗に終わった人物を思い出させる」と言及され，文学作品に例えられている（X 230)。魔女がロマンス作家に，フェザートップが作品に例えられ，かかしを人間の姿にする過程は文学の創作過程と考えられる。そのかかしを作る過程に，『七破風の屋敷』の執筆時の苦労が反映されていると思われる。かかしの外見を魔法で取り繕うことは，表面的に作品を読者受けするように執筆することに相当すると考えられるが，ホーソーンはそんなことをしたくないという心情が魔女の言葉や態度に表れているようだ。つまり，魔女はかかしを創作する際に自らを鼓舞したり，思うようにできあがっていかないことに対して怒りをぶつけたりしている（藤沢「フェザートップ」49)。作品の象徴と言えるかかしのフェザートップを目撃にした民衆は，中身はほうきなどでできているのだが，表面は紳士の格好をしている姿を目にし，見たことのない品位を持っているから古のノルマン人の血が流れているとか，優雅な物腰をしているからフランスの大使だとか言って様々に解釈する。その他の民衆も同様にそのかかしのフェザートップのことを的外れな理由で賞賛する。この民衆は「フェザートップ」を読む読者の象徴と考えることができ，表面的なことしか読めない読者をホーソーンは非難していると考えられる。

この短編の後に，長編ロマンスの『ブライズデール・ロマンス』（*The Blithedale Romance*）が 1852 年 7 月 14 日に発表される。そのロマンスについて，『七破風の屋敷』が出版された後の 1851 年 7 月 22 日に，ホーソーンは友人ホレイショー・ブリッジ（Horatio Bridge）に手紙を書いている。その作品には，「余分に悪魔的要素を付け加えるつもり」であるが，その理由は「読者からの支持を失わずに，連続して 2 冊の地味な本を出して，読者がひるまずにいられるかどうかを疑ったから」だ（XVI 462)。このように，ホーソーンは読者の反応と本の売れ行きを非常に気に掛けている。さらに，「人々が読んでくれる限り，執筆を続けます。自分の労働意欲は，作品への需要と共に増していく」からであると続けており，ホーソーンは多くの読者に読んでもらえる作品を書こうとしていると言えるであろう（XVI 462)。しかし，その本の売れ行きはよくなく，その後のホーソーンのロマンスは 8 年後の 1860 年まで待たなければならなかった。

その最後の完成したロマンスである『大理石の牧神』（*The Marble Faun*）では，序文で「理想の読者」というものに会ったことはないが，そういう読者がいることを信じ，その読者のために書き続けてきたと言っている。「理想の読者」とは，

作者と「同じ性質の（congenial）友」であり，作者の目的をよりよく理解し，成功しているところをより評価し，不十分なところにはより寛大であるような，「全面的な同情や思いやりに満ちた（all-sympathizing）」批評家のことである（IV 1）。入子文子は，この「理想の読者」について，「全作品を貫いて存在し続けた作家ホーソーンの態度表明とみてよい」と前置きした上で，次のように論じている（34）。「ホーソーンは＜ロマンス＞の読者の＜自律的な読み＞に作品を任せることを望んでいるわけではなく，可能か不可能かは別として，いやむしろ殆ど諦めてはいるが，読者が＜ロマンス＞作家の意図する意味もしくは価値を読み取るよう望んでいる」（36）。さらに入子は，「ホーソーンは，優れた芸術作品ないし＜ロマンス＞は，作者不在のテクストではなく，作者が存在し，作者によって作品に意味，もしくは価値を内在させたテクストであり，それに身を委ねて読みとるのが読者だ，と我々に伝えていると言えるであろう」とも指摘している（45）。

また，マイケル・ダン（Michael Dunne）も『七破風の屋敷』の序文で言及される「読者（the Reader）」を論じた際に，ホーソーンは物語を読み進めていく「相互の協力態勢（mutual complicity）」を打ち立てており，それにおいては，作家の義務は可能な限りあらゆる手段を尽くして物語を読者の想像力と協働させることであり，読者の役割は可能な限りその物語で起こっていることを信じることであると論じている（128）。つまり，ロマンスの世界を作り上げるには読者の想像力と協力が必要であるということだ。『大理石の牧神』の模写画家ヒルダ（Hilda）が，「詩人や芸術家が実際に表現しているものよりも多くのものを作品中に見つけることができない者は，詩を読んだり，絵や彫刻を見たりすべきではないと思います。それらの作品の最大の長所は暗示する力ですからね」と言っているように（IV 379），明らかな道徳を求めたり，明らかなセンチメンタリズムを求めたりするような，表面しか読まない読者をホーソーンは期待していない。

しかし『大理石の牧神』では，謎めいたところをもっとはっきりさせてほしいという読者の要望に応えて「後記」がつけられる。気が進まないまでも，謎とされるところのいくらかは答えるが，結局，肝心なところは答えるのを拒否して終わっている。それはホーソーンが，「理想の読者」はもちろん，作者と協働してロマンスの世界を作ってくれる読者を諦めた瞬間なのかもしれない。

このように，読者に期待しながらも失望し続けたホーソーンだが，「古い指輪」が「アリス・ピンチョン」の物語や短編「フェザートップ」と違うのは，書いたのは，「いくぶん文学において実戦経験のない者（somewhat of a carpet knight in literature）」であるエドワードだということを隠れ蓑にして，何の変哲もない話に対して激賞する読者をあからさまに描いたところだ（XI 339-40）。ホーソー

ンは 1841 年 4 月にブルック・ファームに大金をはたいて参加した。彼はその団体に共感したからではなく，そこに参加したら妻を養う手段を得られるのではないかと期待したからであり，その時点で彼には結婚のための十分な財政基盤がなく，2 年以上婚約状態が続いていた。しかし 11 月にはこのユートピア共同体での生活を放棄する。翌年の 1842 年 7 月 9 日にホーソーンはソファイアと結婚し，その日のうちに旧牧師館での新婚生活を始める（Stewart 59, 62）。10 月 21 日に，「リンゴ売りの老人」（“The Old Apple-Dealer”）の原稿を出版社に送っているが，これは 1842 年 1 月 23 日のノートブックにあったスケッチを元に完成させたものだ。その後，ホーソーンはボストンやセイラムに 31 日まで行き，その翌日の 11 月 1 日から 15 日までの間に「古い指輪」を執筆している。つまり，この作品は旧牧師館に来て初めて書いた作品ということになる（McDonald “The Old Manse Period Canon” 20）。ブルック・ファームに大金を注ぎこみ，新婚なのにお金がなく，作品を書いても大して収入にはならず，原稿料の未払いも少なくない中，女性作家の書いたお涙ちょうだいの軽い読み物に代表されるような作品に，多くの読者は賞賛を送っている。そのように深みのない読者と作品にだけ迎合する文学市場に対しての風刺や苛立ちをこめて，ホーソーンはこの作品を書いたのではないだろうか。作品にモラルを求めたクララと作者エドワードとの結婚は，そのような読者と運命を共にするという覚悟だったとも考えられる。「古い指輪」は失敗作なのではなく，あえてエドワードに何の変哲もない物語を作らせ，それを激賞する読者に焦点を当てた貴重な作品である。これほどあからさまに読者批判をしていることが，ホーソーンがその後短編集には再録しなかった理由のひとつだったのではないだろうか。

広島商船高等専門学校

注

*本稿は，中・四国アメリカ文学会 令和 3 年度冬季大会（2021 年 12 月 4 日）で，「「古い指輪」から見えるホーソーンの読者に対する想い」という題で発表したものを加筆修正したものである。なお，その発表は，日本ナサニエル・ホーソーン協会 関西支部研究会 8 月例会（2021 年 8 月 21 日）で，「「古い指輪」における作中人物の枠物語への反応――「伝説」への賞賛と不満の真意」という題で発表したもの（後 *Percica* 第 49 号に掲載）の中で，ホーソーンの読者に対する期待や失望に関し，さらに論考を深めたものである。

Works Cited

Anonymous. “Consumption.” *The Token and Atlantic Souvenir: a Christmas and New Year’s Present,* 1834, pp. 175–89.

Benardete, Jane. “Holgrave’s Legend of Alice Pyncheon as a *Godey*’s Story.” *Study in American Fiction*, vol.7, no.2, Autumn 1979, pp. 229–33.

Dunne, Michael. *Hawthorne’s Narrative Strategies*. UP of Mississippi, 1995.

Folsom, James K. *Man’s Accidents and God’s Purpose*. College and UP, 1963.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. 23 vols. Ohio State UP, 1962–97.

Kennelly, Laura Ballard. “Goldsmith’s History in ‘The Antique Ring’.” *Nathaniel Hawthorne Review,* vol.15, no.1, Spring 1989, pp. 24–25.

McDonald, John J. “Longfellow in Hawthorne’s ‘The Antique Ring’.” *The New England Quarterly,* vol.46, no.4, 1973, pp. 622–26.

---. “The Old Manse Period Canon.” *The Nathaniel Hawthorne Journal,* vol.2, 1972, pp. 13–39.

Olsen, Frederick Bruce. *Hawthorne’s Integration of Methods and Materials*. 1960. Indiana U, PhD dissertation.

Stewart, Randall. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. Yale UP, 1948.

アリストテレース『アリストテレース 詩学 ホラーティウス 詩論』松本仁助・岡道男訳，岩波文庫，1997年。

入子文子『ホーソーン・≪緋文字≫・タペストリー』南雲堂，2004年。

島田太郎「「古い指輪」を手掛りに」『一橋論叢』第73巻１号，1975年，63–68頁。

千野帽子『人はなぜ物語を求めるのか』ちくまプリマー新書，2017年。

藤沢徹也「「フェザートップ」と文学市場」*Persica* 第45号，2018年，43–53頁。

――「「古い指輪」における作中人物の「伝説」への反応 ― 賞賛と不満の真意」*Persica* 第49号，2022年，31–42頁。

Hawthorne's Literature and the Reader: With a Special Reference to "The Ancient Ring"

Tetsuya Fujisawa

Nathaniel Hawthorne's "The Ancient Ring" was published in 1843. It was not reprinted in any short story collection during his lifetime. Few papers have been published discussing this work, partly because it is considered a failure. In this paper, I will argue that Hawthorne's feelings toward his readers, that is, his disappointments and expectations, are shown in the reactions of the characters in the work, who either praise or complain about the "Legend," even though it is not of much substance.

In a church fundraising scene, when the cursed ring is donated by the poor, the curse is purged. However, it is usually difficult to imagine a very expensive ring being donated by a poor group of people, but the audience hearing the story accepts it as a conventional morality tale and raves about it. This is the reader who does not take the story seriously. In such a situation, Edward's fiancée, Clara, praises the work but says, "Your moral does not satisfy me. What thought did you embody in your ring?"

I would like to cite a certain work in the gift book to ponder this statement of Clara's. As the story ends, a character outside the story comes out and asks, "this is all very well, sir, but what is the moral?" The moral is obvious, but he looks for the part where it is clearly written. This is an attitude of trying to quickly get to the heart of the story in simple, simplistic terms, without being willing to explore for oneself what the work is trying to convey. The author clearly states the moral of the story to prevent the "meddler" from asking the same question. This act of being asked about the moral of the story indicates that the "Legend" written by Edward is at the level of a gift book, and that Clara is a "meddler." She was only asking for moral support because she hit on an idea.

It is certain that Hawthorne does not take well to a literary market that has to continually respond to the demands of such readers. It is important to note here that when Clara asks for more morals, Edward gives her "a half-reproachful smile." In other words, at that time, he is still half-expecting his readers.

Hawthorne does not expect readers to read only the surface of the story. In his last completed romance, *The Marble Faun*, a "postscript" is added in response to the reader's request for more clarification of the enigmatic parts. He answers some of the questions, if not unwillingly, but ends up refusing to answer the crucial ones. Perhaps this is the moment when Hawthorne gives up on the reader who creates the world of romance together. The difference between "The Ancient Ring" and other works that indirectly blame the reader is that it was written by Edward, "somewhat of a carpet knight in literature," and it uses that as a cover for blatantly blaming the reader. Hawthorne joined Brook Farm in April 1841 with a large sum of money in the hope that he would have the means to support his wife; he abandoned his life there in November, married the following July, and wrote his first short story there, "The Ancient Ring." Many readers admired the easy-to-understand light reading, even though he was a newlywed with little money, and writing works does not make much money. This work may have depicted such a literary market. I believe that Edward's marriage to Clara, who demands moral values in his work, is a preparation to share Hawthorne's own fate with such readers. "The Ancient Ring" is not only a failure, but it dares Edward to create an ordinary story and focus on the readers who admire it so much. This overt criticism of the reader may be one reason why Hawthorne did not subsequently include it in his short story collection.

National Institute of Technology, Hiroshima College